

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部2年 分林寛奈子

2019年2月3日(日)の活動についての報告

ストラスブールに到着し3日目の朝を迎えた我々は、街の中心にそびえ立つ世界遺産ストラスブール大聖堂の内部を見学すべく、大聖堂広場へと赴いた。しかしながら、日曜日の朝ということもあり、大聖堂の中ではミサが執り行われていたため見学は午後になるまで不可とのことだった。我々は気を取り直し、そのすぐ隣に所在するロアン宮(Palais Rohan)へと向かった。この建物は、18世紀にストラスブールの司教であったロアン大司教(Prince cardinal de Rohan)の宮殿であり、ルイ14世付きの建築家として知られるロベール・ド・コット(Robert de Cotte)により建てられた美しい古典主義様式の建築である。現在は、装飾博物館・考古学博物館・絵画美術館の3つの博物館より成る博物館として一般に開放されており、その横には、大聖堂にゆかりのある彫刻などの展示があるルーブル・ノートルダム美術館(Musee de l'Oeuvre Notre-Dame)が併設されている。この日はちょうど2月の第一日曜であった(フランスでは法律により第一日曜に博物館が無料開放される)ため、我々は無料で全ての博物館を行き来することができた。私は文学部で美術史を勉強しているため、まずロアン宮の中の絵画美術館に足を踏み入れた。ここは宗教画の宝庫であり、ボッティチェリの『聖母子像』やティツィアーノの『ダナエ』など、名だたる巨匠たちの作品を間近で鑑賞することができ、未熟ながらも西洋美術を勉強する者にとっては至福のひとつときであった。その後、ルーブル・ノートルダム美術館に向かったが、なんとここには中世美術の代表的彫刻とも言える『シナゴグ』が展示されていた。この彫刻と出会えたことは、今回の派遣の中で私にとって一番の喜びと言っても差し支えないだろう。教会と共に歴史を刻んできたストラスブールという街で、数々の西洋美術作品と触れ合えたことはかけがえのない経験であった。その後、ミサを終えた大聖堂の内部を見学することができ、美しいステンドグラスや天文時計など、中世ゴシック様式の素晴らしい建築や内装を味わった。

京都よりも格段に厳しいフランスの寒さに耐えつつ、次に我々は、イル川の本流が4つに分かれる地区「プチイット・フランス(Petit France)」に向かった。白い壁に黒の木組みといったアルザスの伝統的な建築が立ち並ぶこの地区は、かつてドイツの占領下にあったこともあり、フランス領でありながらもドイツの文化が色濃く残る場所であった。

夕食は、ストラスブール大学の学生たちと、フランスの伝統的夕食を楽しんだ。日本でもなかなか食べる機会のないエスカルゴや、予想をはるかに超えた量で出てくるシュークルート(ドイツ語でザワークラフト)など、普段とは異なる食事に我々は大いに盛り上がった。ストラスブール大学の学生は、日本語学科で研究しているということもあり、彼らの堪能な日本語に、英語すらままならない私は恐縮するばかりであった。また、この食事会にはストラスブール大学のシャール先生も同席してくださり、先生の明るいお人柄に、場は終始和やかな雰囲気包まれていた。こうして、フランス3日目の夜は終わりを迎え、ホテルに帰った我々は来たる翌日のプレゼン発表に向け最終の仕上げに取り掛かるのであった。

2月3日の活動に関する報告は以上である。最後のまとめとして、今回の研修全てを通して私が学んだことと言えば、それは「外に向かって一歩を踏み出す勇気」であろう。サポーターとして現地から合流してくださった京都大学・ハイデルベルク大学国際連携文化越境専攻の1期生である劉郁希さんをはじめ、この研修で出会った数々の先輩方の全員が留学経験者であり、皆様には留学を通じて得た貴重な経験や、それに伴う苦労など、非常に興味深いお話をたくさん聞かせていただいた。そしてハイデルベルクでの京都大学欧州拠点訪問では、京都大学と海外大学の多様な連携や、京都大学による海外留学の支援など、我々が思っている以上に留学への窓が開かれていることを知った。長い間京都に暮らしていると、留学といっても自分とは少し距離のある遠い事柄だと考えてしまいがちだったが、一歩踏み出して自ら知ろうとすることで、留学はもっと身近なものになると実感した。私にとって、今回は二度目のヨーロッパ渡航であったが、観光客として訪れた一度目とは異なり、学問的な面でもかなり密度の濃い8日間を過ごせたように思う。特にハイデルベルク大学では、学生の国籍が様々であり、ヨーロッパだけではない多様な価値観に触れることができた。中世以来のキリスト教文化が根付く場所としてだけでなく、国際交流の拠点としてのヨーロッパの魅力を再発見した今、次は留学生として2,3年後、再びヨーロッパの地へ戻ってきたいと考えている。